

第8号 華山会報

平成14年4月11日
財団法人華山会

田原から日本を変えよう

渡辺華山の今日的意義

作家 童 門 冬 二



日本の各地方で地方分権が進められています。このことは、考えようによっては地方自治体が江戸時代の「藩(大名家)」に戻る、ということです。つまり、・自前の政策を立案し、実行する・そのための財源をみずから調達する・地域の特性(地域文明)を創造し、情報として発信する、などが主要な仕事になるからです。これは国(政府)がナショナル・ミニマムを実現し、地方はローカル・ミニマムを実現して、互いにパートナーシップを発揮しながら、日本を向上させるといことでしょう。

そうなる、地域でくらしでも地域のことだけに関心を持っていてもダメだ、ということになります。国際情報・国内情報・地域情報のすべてに目をひらき、耳を立てなければなりません。『世界の中で・日本の中で、その地域はどうあるべきか』を考えるのが、いまのようなIT社会での地域の生きかたでしょう。

渡辺華山は、江戸末期の日本でこのことをはっきり認識し、行動しました。わずか一万二千石の田原藩三宅家の藩士でありながら、極端にいえば、

「田原から日本を変える」

という理想をかかげたのです。江戸時代の日本は鎖国していたといわれます。しかし華山はそうは考えません。

「長崎港は開かれている。中国とオランダとは依然として交流している。つまり部分開国しているのだ」

と考えます。おなじような考えかたをする学者たちとグループをつくり、世界情勢を分析し、そのなかで日本のありかた・幕府のありかた・藩のありかたを模索します。そして

「日本人のありかた」

を探求します。この前提に立つて

「田原藩はどうあるべきか」

と考えたのです。つまり田原藩のローカル・マキシマムを設定したのです。財政難克服のために、当時一流の農政学者大蔵永常を招いて産業振興をおこなったり、江戸の一流学者と交流して、いろいろな考えを藩政に導入しました。これは華山が文や絵にすぐれた才能をもつ雅人だったことも影響しています。こうして田原藩を改革し、その成果を幕(国)政に反映させる、というフィードバックをおこないました。東京の地名に三宅坂(田原藩の江戸邸所在地)という地名があるのも、そんな話しのひとつでしょう。



渡辺華山幽居跡

六年社会科学習 渡辺華山

赤羽根町立若戸小学校長

山田政俊



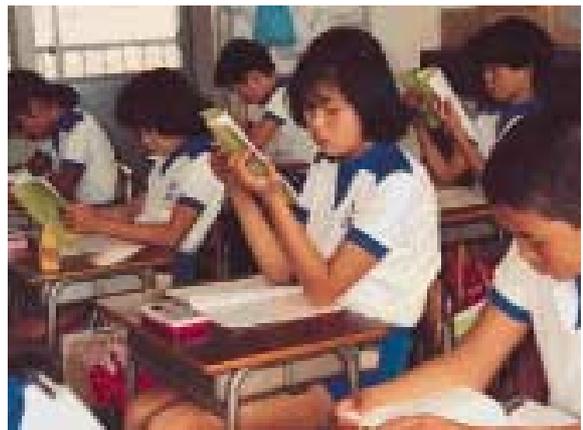
に豊橋南高等学校の別所興一先生の
登場を願うことである。

平成元年十月二六日、第一回目は
私の授業。

「渡辺華山について、知っている
ことを発表してください」の問い掛
けから始めた。「大名行列が通るの
に、ポーとしていて叱られた」「薪
を拾いながら本を読んでいた」「そ
やあ二宮金次郎だぞ」のキツイ反論
「幕府に睨まれた人」などの意見が
出た。次に「少年物語 渡辺華山」
を一冊ずつ配り、指名して大きな声
で本文を読ませたが、途中でチャイ
ムが鳴ってしまった。

この日の午後、第二回目は別所先
生の授業。

授業が始まると、別所先生は「近
代日本の夜明け前の人」と板書をし、
子どもたちの顔を見渡しながらゆっ
くりした口調で説明を始めた。しか
し、高等学校の先生らしく、「どう言
ったらいいのかな」と説明に窮する
場面も見られた。次に「画家 田
原の家老様 外国事情を勉強」の三



項目について詳しく解説をした。私
にはあれやこれやと質問する子ども
たちも、ここに来て別所先生の顔を
食い入るようにつめ、説明のこ
ばを全部頭の中へ入れようと集中し
た。私の授業には見られない光景が
出現した。今度は「ちょっと先生、
華山先生は江戸のお屋敷に住んでい
たんですか」のように、私が話の途
中へ割り込むようになってしまった。
別所先生の登場は、この後三回
目・四回目と続き、子どもたちには
得難い経験の授業となった。

目次

題字「華山会報」 華山会理事

小澤耕一

田原から日本を変えよう

渡辺華山の今日的意義

童門冬二

赤羽根町立若戸小学校長

目次

画家渡辺華山の心象

『一路功名図』

退役願書之稿 (4)

田原町博物館所蔵品から

華山・史学研究会だより

「耐煩」

紀行文『游相日記』 (6)

各地の美術館を訪ねて

「出光美術館」

神戸小学校で聞きました

「華山を知っていますか？」

田原町博物館からのご案内

画家渡辺華山の心象

渡辺華山筆 一路功名図

文化十二年（一八一五）紙本淡彩

縦二二八・〇cm 横三三・〇cm

個人蔵

款識は、画面左に「乙亥春日写于
寓画斎 華山」とあり、落款印に
白文円形印の「邊静」と朱文方形印
の「寓画斎」を、右下に白文長方形
の「山水清音」を使用しています。

水面を波立たせる
ほどの強い風の中
を、その風に立ち向
かうかのような白鷺
が岩上に孤立してい
ます。白鷺の後方
は、伸びやかな蘆が
風を受けています。
先ほどまで雨雲まじ



りであったところに、日差しが差し
込み始めたところでしょうか。まだ
なお暗い雨雲を墨流しの描法で描い
ています。

渡辺華山は、関東文人画界の大御
所で、寛政の改革を行なった松平定
信の寵愛を受けた谷文晁（一七六三
〜一八四〇）の画塾写山楼に多く通
っています。この写山楼で、一七三
一年に長崎に来日した清の画人で、
色彩あざやかな写実的花鳥画を多く
描き、人気のあつた沈南蘋の作品を
多く模写していますが、この作品も
沈南蘋の画風を学習したものです。
また、華山は文化六年の十七歳の時
父の世話で、南蘋派の金子金陵（？

〜一八一七）につき、文晁の弟子で
あつた金陵の紹介で写山楼に出入り
するようになります。

図中の年紀は、文化十二年で、同
年の手記である「寓画堂日記」（元
旦から大晦日までの日記ですが、九
月十三日から十一月七日の記述は欠
落しています。個人蔵）にこの作品
に関連すると思われる記述がありま
す。二月三日の条には、「入湯上寫
山樓摸南蘋晚昏归来夜直公用筆而摸
…丑刻寝」、同十二日の条に、「終日
登寫山樓摸南蘋夜課摸…子刻寝」、
同十五日の条に、「描蘆鷺図翠岳君
発会上堂四ツ半時帰」とあり、この
二月十五日の条で、「蘆鷺図」と記

録された作品がこの「一路功名図」
と考えられます。前年には、「蘆汀
双鴨図」（常葉美術館蔵）や同じ年
の鹿図（個人蔵）など他にも多くの
沈南蘋に強く影響を受けたと思われ
る作品が存在しています。当時の文
人画家達は、日本に渡来した中国画
家の作家の代表格である沈南蘋を盛
んに模写しています。中国秦嶺山脈
の東側にそびえる名山で、峡西省華
陰県にある西岳にあたる「華山」を
画号に使用した渡辺華山もそのひと
りでした。

田原町博物館学芸員 鈴木利昌

退役願書之稿四

前回の脚注 で予告した通り、朱子学と陽明学について紹介しておきます。

朱子学も陽明学も、儒学の中の立場を異にする学説です。儒学とは、中国の春秋時代（前七七〇～前四〇三）に孔子（前五五一～前四七九）が始めた儒教に、実践倫理・政治哲学的要素が加えられ、教学として成立したものです。日本へも四、五世紀に伝えられ、政治や文化に大きな影響を与えました。

一つの学説が広く浸透すると、いろいろな考え方が出てくるもので、儒学もこの例にもれず、中国の宋の時代（九六〇～一二七九）に、新しい考えが現れました。その考えを集大成したのが朱子（一一三〇～一二〇〇）で、その儒学思想を朱子学または宋学といえます。それに対し、同時代の陸象山（一一三九～一一九二）が朱子学の考えに對抗する学説を出します。これを継承し、明の時代（一三六八～一六四四）に王陽明（一四七二～一五二八）が朱子学に對抗して唱えた学説が陽明学で、王学とも陸王学ともいいます。

朱子学は、日本へは鎌倉時代に伝えられていますが、本格的に受容されたのは、明末にあたる江戸初期であるため、陽明学も同時に受容されます。江戸初期の儒学者藤原惺窩は、朱子学に拘泥せず、陽明学も受容します。しかし、惺窩の弟子で朱子学を志した林羅山が家康に登用されることにより、朱子学は、後に、幕府学問所である昌平黌で講じられることとなります。その後、松平定信の寛政異学の禁にみられるように、朱子学は、幕府の正学となっていきます。

それに対し、陽明学は、日本で初めて陽明学のみを信奉することになった中江藤樹以降、熊沢蕃山・佐藤一斎・大塩中斎等学者は出ますが、明確な学派を形成することなく幕末に至ります。

二つの学派の大きな違いとして、万物を構成する「理」と「気」の捉え方の違いが挙げられます。朱子は、万物を理と気の結びついたものとし、理気二元論の立場をとります。朱子学では、実体（理）は気と結びつかないと現象とならないと考えます。これに対し、王陽明は、気を唯一の実体とし、理を気の状態に即した法則とする理気一元（合一）論の立場をとります。だから、陽明学では、実体（気）即現象となります。現象態が実体だから「心即理」と考え、陽明は知行合一＝認識即実践の方法論を確立します。



孔子像（渡辺華山筆）

ちなみに、陽明の死後、陽明学派は、陽明の四言教の解釈をめくり右派と左派に対立します。陽明学右派は、実体と現象を対立させる立場をとり、陽明学左派は、実体と現象を一致させる立場をとります。陽明学右派は、思想的には、実体と現象を分離する朱子学に近づくこととなります。ですから、陽明学右派は、朱子学を否定できず、幕藩体制下の日本の陽明学派はみな朱王折衷の態度をとり、華山の師・佐藤一斎は、「陽朱陰王」と言われます。

鳥居耀蔵が蛮社の獄の時に提出した告発状に、「華山が大塩平八郎と通信した形跡が認められる」という一文がありますが、陽明学という思想的なことが関係しているのかもしれませんが。

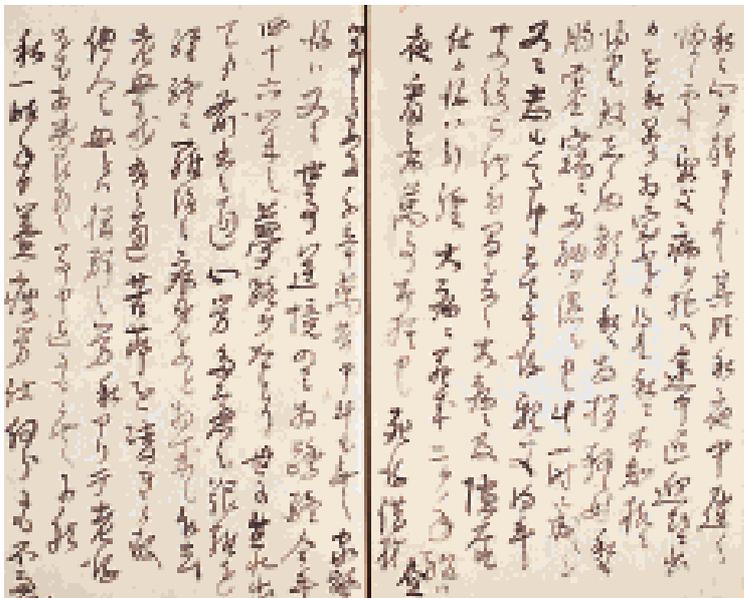
八 計画の挫折

小鳥が大鳥のことを学ぶのは、分限を知らないようですが、「志は満べからず」ともいいます。徒然草にも、「物思ひ立んには、事傷るゝをも顧るべかざる」(物を思い立つたら、事が破れても顧みるな)とあります。行くところまで行ってみただったのですが、『孔子家語』に「子養んと欲れども、親とゞまらず、木定らんと欲れども、風止まず」(子が親に孝養を尽くそうとする頃には親がなくなっている、木が動くのをやめようと思つても風が止まない。どちらも、親孝行しようとする時には親は死んでいる、という意味。思うようにならないことの例え。)ということもあるので、いったん学び終わったら早々に帰府し、孝養を尽くしたい気持ちに表し、今すぐにも家を出ようと思っていました。

しかし、父が私の様子から事態を悟り、心痛し、太白堂萊石や堀備後などに頼んで、私の気持ちを变えさせようと思いました。

華山の親友の俳人・五世太白堂(加藤萊石)。文政四年(一八二二)没。

そのころ、私が夜遅く帰ったことがありました。父は病を抱えていたのですが、途中まで迎えに出していました。私は、そのことに気づいたのですが、父は私に知られないように帰ったので、私も気づかないふりをしました。私が帰ってから、父がなにくわれない顔で挨拶をしてくれた時には、私の胸がふさがり、ひそかに両袖を涙で湿らせたものです。この一事に感じ入って、またしても志がくじけてしまいました。



九 家督を継ぐ

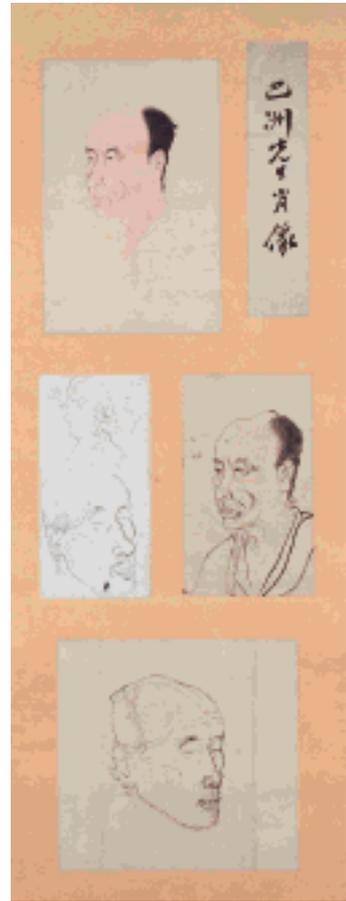
その後、父は年寄役を命じられましたが、まもなく大病になり、隠居しました。その後も病は続き、二年ほどは昼夜看病にあたり、ほかのことは構えませんでした。父の死後、借財などのために、千辛万苦したことは申すまでもありません。家督を継いだ後は、思うようにならないことばかりで、ついに今年四十六歳の夢路をたどることになりました。世に生まれてより、これまでに書いてきたとおり、心労多慮の艱難を経て、ついに難治の病身となってしまいました。

文政二年(一八一九)に、父定通が御勝手御年寄順席を仰せつけられる。

定通が隠居したのは、文政七年(一八二四)同年、定通没す。隠居後二年ほど看病したというのは、華山の勘違いと考えられる。

しかし、母のことですが、右に述べたような苦節をしのいできたので、他人の母とは比べようのない苦勞をしてきました。私があつて、母の老後を養うことは申すまでもありません。しかるに、私は、一昨年からますます疲勞し、何分にも不慮

渡辺巴洲像稿(五図)(渡辺華山筆)



の病が生じはしないかと心配しています。

天保七年(一八三六)「登病をおして出勤を続け、遂に九月より年末にかけて大病となる。」(華山会『華山年譜』四十八頁)

昨年、弟が死んでからはなおさら病気になるな
いかと思います。万一母より先に一大事が起これば、死んでも魂は天には帰らないでしょう。せめて、勤めを辞し、一年でも、保養したいと思えます。つまるどころ、万一のことを考え、泣涕して嘆願する次第です。そのうえ、右のようなわけで
すから、なに一つ政治の役に立つような勤める方法を心得ていません。年寄役の職責を果たさないで地位だけは年寄役についていることとなり、たいへん恐ろしいことになっています。そつではあ

つても、そのことはお

許し願えても、私は、政治の助けとなるような学問はできず、これまでしてきたことといえ、絵をかいて内職をすることはかりです。たとえ発奮しても、日暮れて道遠く、そのうえ病身となってしまうては、どうしようもありません。

天保八年(一八三七)、末弟五郎没。五郎が亡くなったのが昨年とあるので、この『退役願書之稿』を書いたのが天保九年と思われる。なお、『退役願書』を提出したのは翌年。『史記』伍子胥伝の言葉。年をとったのに、目的はまだなかなか達せられないこと。

十 退役理由を 絵に例える

一 退役の理由を、絵のことから推し量りたいと思います。絵のことも第一の心と言われるものに、志を一途にたてなくてはいけないということがあります。これなくしては、物の形が整って、

落ちなく見事に絵がかけるわけではありません。また、心だけいよいよ激しく勇みたっていると思つても、手も心の通りに動かなくては絵はかけません。

また、心や手が自由になったからといって、それだけで絵がかけるとはいえません。胴体や四肢を落ち着かせることができなくては、または、机に向かった時に、腹からかきたいという気持ちがあふれ出ているように感じなくては、絵をかくことはできません。こういうことから、体中、髪の手先・爪の端まで絵をかこうという気持ちになつてこそ、絵をかくことができます。

素人の立場から言えば、爪の先や髪の手先は絵には関係ないと思うかもしれませんが、髪を結んで頭の上が気持ちよくなり、爪を切って手をきれいにしなくては、絵の具をこなすことができません。

現に、古人も、「明窓浄几は書の台、風雨擾雜は書の乖」(明るく清らかな書齋は書に適している、乱れて落ち着かない書齋は書に適していない)と言っています。身体の外のものでさえ、このとおりです。ましてや体の中のこと、なおさら申すまでもないでしょう。

研究会員 柴田雅芳 (続)

田原町博物館 所蔵品から

重要文化財 渡辺華山筆

一掃百態図

文政元年（一八一八）紙本墨画淡彩
縦二六・四cm 横一九・五cm

後に三河田原藩の江戸家老にもなる文人画家渡辺華山（一七九三～一八四一）が、文政元年十一月に二十六歳で描いた一掃百態図は、化政期の江戸の市井の風俗を一日二夜にして完成させたもので、装丁は三十二葉の画帖です。

華山は文化六年（一八〇九）に、谷文晁の門に入り、文晁の画塾写山楼に出入りするようになります。その後、古画や菱川派の絵の模写を行なったり、この年までに第八編まで刊行されていた「北斎漫画」を目の当たりにし、風俗画のあり方を追求しながら、当時の風俗画の状況に強く関心を抱いていることが総論から

わかります。

一掃百態総論三頁より始まり、鎌倉時代の正応年間から、室町・桃山時代を経て、江戸の寛延・明和に至るまでの古画の模写を十一頁載せ、漢文墨書による序文一頁、化政期の風俗スケッチが四十一頁、最後の一頁は跋文と思われる文章という構成になっています。文章・スケッチ部分には、朱及び墨による訂正箇所が

数箇所見られ、また、最後の五頁は描線のみで、着色はされていません。出版を目的に描かれた冊子のようですが、未定稿のままとなっている点と、「北斎漫画」に代表されるような絵画手本ではなく、当時の江戸の庶民世界風俗の忠実な写生本である点で、若き日の華山の鋭い観察眼を知り得る貴重な作品です。晩年には、自分の背丈と同じくらい高く積める

ほどたくさんの手控画帖を保有していたというエピソードからもわかるように、古画の模写を繰り返し、見るものを絶えず、スケッチし、絵の対象とした物の内面までも見る者に感じさせるスケッチによる写実主義が、後の名作と呼ばれる華山の人物描写につながっていきます。

当初、昭和十三年九月五日に重要美術品に認定され、昭和三十年二月二日に他の遺品とともに、

渡辺華山関係資料の一部として重要文化財に指定されます。昭和五十三年三月二十四日に歴史資料に指定替えられました。この作品は、平成十四年春の企画展「北斎漫画展 - 画狂人が与えたジャポニスム」と同時開催の「渡辺華山風俗画の世界」（特別展示室）に出品されます。

田原町博物館学芸員

鈴木利昌



華山・史学研究会だより

華山の書 2

「耐煩」

平成七年度に田原町が入手した華山資料の中に、華山の書「耐煩」と大書し、次に細かい字で煩務に耐えることを訓戒した白文が記されている大額面がある。

これは、天保九年（一八三八）五月十六日に、江戸家老の華山が小川丈なる人物に贈った訓戒の書である。

小川丈というのは、小川岑右衛門のことで、江戸詰を二カ年勤め、家老佐藤半助始め御朱印守護の面々と共に、五月二十五日に江戸を立ち、六月四日に田原城下へ帰った記事がある。この江戸を出立する前に、岑右衛門が五月十六日に華山より贈られたのが、この「耐煩」の書であることが確認されている。

小川岑右衛門が江戸詰めの際方元締を勤めていた天保七年（一八三六）六月より同九年（一八三八）五月末の間は、国元田原では大飢饉であった。一万二千石高の藩が二カ年連続して減収一万余石となり、蔵米は底を割って藩支出や家臣給米に事欠

き、国元田原の藩士は、家老から中間小者まで、オール二人扶持の給料を三年間続けた。そのため藩の公務は簡略化され、藩士たちは家付きの門田や前栽畑で自作農をして飢えを凌いだ。岑右衛門の家格は、席次は給人格扱いであるが、文政三年（一八二〇）の『祐筆日記』に中小姓とあるから、給米は四・五人扶持であり、その生計は大変である。しかも職務上は蔵方元締として一藩の経理収支を苦面せねばならず、その生計は苦慮辛勞の連続であった。豪商富農への借金にも走りまわった。天保十一年（一八四〇）の暮れには、田原藩の借金は四万千百両と記録されている。

岑右衛門の八方ふさがりの四苦八

苦を察して、彼が国元へ帰る時、江戸藩邸の最高責任者華山は、彼に苦言を送って勇気付けたのが、この「耐煩」の書である。

『田原の文化』第二十三号田原藩財政の崩壊 小澤耕一著より」

田原町はこれを浜松方面から購入したものであるが、昭和三十六年、華山没後百二十年・華山名作展（東京・日本橋・三越百貨店・日本経済新聞社主催）に出品されたことが記録されている。

耐煩 二大字額「天保九年」

書き下し文

陳榕門云う、官に居り、事に莅み、訴を牒するに、紛錯は日に出で事を生じ、毎事躬親料理せんと欲し、未だ以て苦と為さざる者一もなし。苦を厭ふの心有れば、便ち耐えざるの意有り。或いは草卒に事を了り、或いは他人に手を仮り、或いは鬮茸稽延、或いは急遽序無し。民は亦其の累を蒙る事多ければ、則ち其の平を得ず。煩に

耐ざるの流弊は良に浅からず。

天台先生、先生の姓は耿、名は定向、字は在倫、耐煩の説は、情に入り、理に入り、錮病を切中す。并に耐煩は更に廉の上に在ると謂い、大抵斯の世、斯の民の心に、己を入れざる有り。則ち汲々孜孜、津々宣々、委曲を誠く求め、以て済有るを期つ。煩なると雖も、其の煩を厭わざるは、君子（孔子）の衆寡無く、小大と無く敢えて慢る無し。

古聖の遺に泄ざるは、遠きを忘れざるも、この意に非ざる無し。切母は好煩瑣を作視す。更に徒視すべからず。能く学苦に耐ふる為す已なり。

小川丈は、怪々として能く慮そを守りて足り、自ら樹つ。然るに、紛を理するに情慢にして世に酬ゆるを恐る。叢勝は免るべからざるなり。故に発くにあらず、之を書して贖と為す。

時に戊戌癸亥朔十六日なり

渡辺 登

耐煩(たいはん) 二大字額「天保九年」(1838年)

耐煩(たいはん)とは、心痛を耐え忍ぶということ。この言葉について、つぎの各人は、それぞれつぎのように述べている。

陳榕門(ふようもん) 清・臨桂の人)は、官職にあつて、仕事をしている時は、訴訟を聞いてみると、訴えが入り乱れて毎日起きています。毎度、自らそれを処理しようと思ひ、苦勞しないでいる者はひとりもいません。苦勞を厭がる心があると、耐え得ることができないという意味がある。あるいは、あわただしく事を処理しようとして、他人の力を借りたり、あるいは、軽率で卑しく、しつかりと説明ができないものである。人民はまたその影響を蒙ることが多いから、則ち、公平に扱われることがなくなつてしまふ。心痛に耐えない世の中の弊害は、まことに浅からぬものがある。



天台先生(明・黄安の人)、先生の姓は耿(こう)、名は定向、字は在倫。耐煩についての説は、情に入り、道理にあつていれば、頑固な困難な問題でも解決することができ。同時に、耐煩とは、清廉潔白より更にいさぎよさを必要とするもので、おおかた、世情、人民の心、則ち政治の上で自分を抜きにして考えるものである。則ち、気をゆるめず

にことにあたり(汲々孜々)、あとからあとから問題提起をして(津々亶々)、詳しく細かくすみずみまで行き届いて(委曲) ことごとく対処し(誠求)、仕事を終えることである。忙しいからといって、その忙しさを厭わないということは、君子(孔子)が、相手の多少に関係なく、また大小にも関係なく、決して侮らないということである。

古聖(孟子)は、(武王は)近親者だからと言って、なれなれしく粗略に扱うようなことはなく、また遠い所の者だからと言って、忘れて放

つておくようなことはしない。切母(孟母断機のご事)は、はなはだ(好)煩瑣(はんさ)の意味をさし示している。更に、徒に指し示すのみではいけない。よくよく学苦に耐えるのは、おのれ(己)のみだからである。

小川丈(田原藩士小川岑右衛門)は、こちこちの小人物で、しつかりと質素を守り、出世した人物である。しかしながら、紛争を処理するのに怠慢をして世間に迷惑をかけることを恐れた。こまこまとまとまりのないことのないように、故に、非をあらばき、これを文書にして残した(贖)。
 時に天保九年(戊戌)五月(蕤賓)十六日
 渡辺 登

華山・史学研究会長 渡辺巨祥

紀行文 游相日記(6)

この坊さん(熊野堂の主)も酔って舞った。
撫松(斎藤鐘助)がやって来た。私は、酔って
寝ていたので知らなかった。

洞寿(江戸の画家狩野洞寿)の養子も来て飲んだ。この人はたいへん酔って、自分が借りている座敷へも酒肴を設け、錦波(柘原宗次郎)と論争などをしたそう。私は、自分の宿所で仮眠していたので知らなかった。夜明けまでたいへん騒々しいように覺えた。

相模国丹沢山(相模国西方の山塊)は東方(厚木の西方)にあり、厚木から距たること四里(約十六キロメートル)である。そのまた東方に村があり、田代村(相模国愛甲郡田代村)愛川町田代、厚木の北西、丹沢山の北東。丹沢山・厚木・田代村の位置関係を間違えている(という)。寺は勝楽寺(満珠山、曹洞宗)という。主の天外和尚(天外独生、勝楽寺二十四世)は、相模国で第一の人物(という)。佐藤一斎(華山の儒学の師、昌平黌教授)の塾生某は、発意して僧になり、禅寺山中に

三年こもって修行をしたが、成就せず、今は骨身を惜しまず天外和尚のために働いている。名を天童という。私は、厚木に来てこれを聞き、会いに行こうと思ったが、果たせず、残念である。

金田村(愛甲郡金田村)厚木市金田、和光院の主(日蓮宗妙純寺の僧侶か)の日峰は、説教がうまい。演壇を用意して机をたたき、雄弁は人を動かす。それゆえにその行くところには、磁石に針が引かれるように、聴衆が並びやって来る。つまり、日峰の説教は、天下に二人としない、俗に国内一の仏さんと呼ばれている。

厚木の八幡屋善五郎(厚木下宿中丸善五郎)には特技がある。双六のゲームをやれば、一勝負はおろか、半勝負(半局)でも人に負けることはなかった。

厚木の越知忠助は、薰岱(俳号)と号し、医療を家業として俳諧を篤笠(田川鳳朗)に学び、有名である。

流浪の人、竹田十兵衛(厚木上宿住)は、実庵と号し、儒学を教えている。今井隆正(元津和野藩士、当時亡命していたが、後に臣籍に復す。前号参照)は、国学に秀でていた。依田竹谷(名は瑾、字は子長、谷文晁の門下)は、絵画に巧みで、私と肩を並べる人である。

私は、わずか二夜と一日にして十有余人の友を

得た。古い書画二十余軸(内わずかに三軸を得た)、古い鐘銘の拓本を一つ、二宮の神宝、古瓦拓本一つ、中国古代の学者の優れた詩歌十余首を見た。たいへん楽しい二夜を過ごした。絵を十五枚描き、七言絶句を二首作った。酒を飲むこと一斗、肴は十皿買った。地勢、水利、人物、風俗、政事、古廟、鐘碑、物産、生業、方言、その他細かくて重要でないことを聞いた。たいへん多くの



相模三の宮・比々多神社

ことを聞いた。

小野村（愛甲郡小野村＝厚木市小野）に、小野神社がある。俗に閑香大神と呼んでいる。ただし、式内社（延長五年 九二七 に編纂完成した『延喜式』 神名帳に記載されている神社）相模国十三座のひとつである。

伊勢原（相模国大住郡伊勢原村＝伊勢原市。厚木から約七キロメートル南西）を去ること僅かに一里余りで、日比田神社（式内社比々多神社。伊勢原市三之宮にある）がある。これは、相模の中の第三の宮である。神官は大貫左近大（太）郎という。廟はおよそ六社ある。中に諸神の像を安置している。その中に大穴牟知命（大國主命）がある。皆、銅で造られている。また、神宝とされる古瓶（須恵器）ひとつがある。狻猊（獅子の古名、狻猊）がふたつある。あるいは、武内宿禰（孝元天皇の曾孫で、景行・成務・仲哀・応神・仁徳の五朝に仕えたといわれる伝説上の人物）が造ったものという（狻猊は関東最古のものといわれ、木像である。瓶とともに平安時代初期のものとして推定されている）。自分の得たのは、瓦文撒扇図の拓本である。ただし、この廟の宝である。

祭りは辰の某月（五月五日、端午の祭り）、神輿が里を出る。村人の子もたちが来て神輿を担ぐ。神は横行を嫌う。輿の出る所をもって定めら

れた方向に向かう。真つすぐに定める。行く所に家屋があれば渡る。山があれば登る。田圃が入り乱れ、その行ははなはだ苦しく、異祭（異彩）をなしている。

川原口（相模国高座郡河原口村＝海老名市河原口）に、有鹿神社がある。これもまた式内社の中の廟である。



国分寺の梵鐘

国分村（高座郡国分村＝海老名市国分）に、古い国分寺がある。ただし、尼寺である。自分は鐘名を得た。寺は聖武皇帝の御願によるという（天平十三年 七四一 聖武天皇が国分寺建立の詔を出した）。医王善逝の聖跡である。略す。大檀那は源季頼（村上源氏海老名氏一族の国分季頼）。平氏の娘。原氏（源氏の誤りか）の娘。源季久（不詳）。正応五年（一二九二）歳次己辰（一二九二年は壬辰）、十月六日という。

梵鐘は物部国光の鑄造で、国指定重要文化財。国分季頼が寄進した頃には、相模国分寺・国分尼寺は薬師堂に移されていた。薬師堂は丘陵の上にあつたが、室町時代に現在地に移転し、梵鐘もここに移ったという。鑄造者物部国光は、鎌倉の円覚寺の鐘（国宝）をも鑄造した名工である。

星屋（高座郡座間入谷村星谷＝座間市入谷）の星谷寺に鐘がある。嘉禄貳年（一二二六）のものである。この寺は八幡の祠を安置している。坂東（一字六王）のひとつ（坂東三十三力所観音霊場の第八番）である。

梵鐘は源信綱（宇多源氏の佐々木信綱。鎌倉幕府創業の功臣佐々木定綱の四男。承久三年 一二二一 に起こった承久の乱に際して幕府側で戦う。乱後、上皇側についた兄広綱に

代わって近江守護となった）が寄進したもので、国指定重要文化財。なお、「嘉禄貳年」は、「三年（一二二七）」の誤り。

林村（愛甲郡林村＝厚木市林）に、相模入道時頼（鎌倉幕府執権北条時頼）の碑（福伝寺にある板碑）がある。



星谷寺

がある。極楽寺（曹洞宗渡打山、廃寺）という鐘がある。建久七年（一一九六）のものである。津久井県（相模国津久井郡）、今は県はない。石老山（津久井郡藤野町牧野・相模湖町寸沢嵐の間にそびえる山）がある。清く秀でて奇抜である。神がある。飯縄大権現という。

戦国期頃から単に津久井、あるいは津久井領と称されたが、元禄四年（一六九一）代官山川貞清が「津久井県」と称するよう命じた。以後、明治三年（一八七〇）まで続き、同年「津久井郡」と改称した。近世において「県」が単位となったのは、全国でこの一カ所のみという。「今は県はない」の意味は不明。華山が旅した天保二年（一八三一）ころにはあまり「県」と称さなかったであろうか。

小谷（高座郡小谷村＝寒川町小谷）・田端（高座郡田端村＝寒川町田端）高座郡の間に一の宮（高座郡宮山村＝寒川町宮山、寒川神社）がある。すなわち、相模国の一の宮である。安置している神を知らない。その神、神官は兼古伊予守（不詳）という。この地は、梶原景時（鎌倉幕府創業の功臣だが、源頼朝の死後、政争に敗れて、正治二年一二〇〇、上洛を企てたが、駿河国 静岡県で敗死した）の城跡（高座郡一之宮村＝寒川町一之宮）である。



相模一の宮・寒川神社

相模国丹沢山の頂からここまで、原漢文

廿四日、晴、

卯の刻とも思つ頃、起き出た。日記を記す。夜が明ける。宿を借りる人のたばこをはたく音、咳をする声、くるま井戸、膳をすえる音、やがてきたなき女が梅干しをそえた土瓶を持って出て、茶を入れるなど、旅の景色である。

撫松が来て、六勝図（厚木六勝）を求めた。一揮した（前号に掲載）。

清田半兵衛（厚木の資産家）が画幅を携え、鑑定を求めてきた。皆、平凡な絵である。

中野新兵衛（米新という）が来た。これは厚木の名主である。新兵衛がいう。引火（付け木。薄い木切れの端に硫黄を塗ったもの。火を移すのに用いる）を男は左、女は右へ入れれば、足を痛めない。飛脚する者は、皆これをしている。

浅田文治郎（華山の知人、不詳）、これは江戸本所に住んでいる人であるが、障ることがあつて厚木の伯母の所へ来て宿つて居るという。自分が来たのを聞いて訪れた。

駿河屋彦八（厚木の侠客）が来た。

錦波は宵より酔つて伏せている。起き出て話した。

蘭齋（厚木の医者唐沢蘭齋）が来た。横装師（表具師）が来た。撫松が、酒と肴を買つて、もてなす。

狩野洞寿、江都（戸）へ帰る。沅齋（不詳）、秀水（不詳）等と、自分の住まいを訪れると約束した。先に立ち去る。

昼飯を差し上げて、みんなに別れをつけて、去らうとする。皆、袖を引いて帰さないのを、振り切つて、出て行く。宿の主人も、又、別れを惜し

んで、おとといからの雑費を与えようとするが、受け取らない。酒と肴との代金、また、何くれと世話してくれたお礼、打ち合わせて、小金（黄金）金貨か）二両と、白かね（銀貨）一両を投げ与えて立ち去る。蘭齋は、金田の渡し（厚木の渡しより約二キロメートル上流にある、中津川の渡し。厚木から金田へ行く時に通る）まで見送つた。この川は、厚木の川と同じ川で、渡る人もたい

へんまれである。

柘原宗次郎、金波（錦波の誤り）、詩人である。書、南宮を学。

用田村（高座郡用田村＝藤沢市用田）、伊東彦右衛門（孫右衛門の誤り）、豪農で、東照宮（徳川家康）の御立ち寄りの家である。

一（之）宮、日野屋新太郎、豪農。栗原村（高座郡栗原村＝座間市栗原）、大屋弥市、十八万両の豪である。

八幡屋善五郎、双六関東一、厚木の人である。

金田、和光院日峰、説法は海道一である。

するかや彦八、厚木、酒井村（大住郡酒井村＝厚木市酒井）、きつい男である。

唐沢蘭齋、名は孝順、字……。

熊ノ堂。

治助（不詳）。

（終）

研究会員 加藤克己



梶原景時館跡

各地の美術館を訪ねて
出光美術館

東京都千代田区丸の内三丁目一
番(〇三)五七七七 八六〇〇
交通 JR有楽町駅

地下鉄日比谷駅
地下鉄有楽町駅
下車徒歩5分



開館時間 午前十時～午後五時
休館日 月曜日(祝日・振替休
日時は翌日)、年末年始
展示替期間

出光美術館は、出光興産株式会社
の創立者である出光佐三氏が七十有
余年にわたって蒐集し、愛蔵した美
術品を公開するために昭和41年秋に
開館しました。「美術館は独創と美
と努力が結集した一つの美術品でな
ければならない」との信条のもと、
館藏品による展覧会を開催していま
す。昭和47年9月には財団法人とな
り、昭和54年10月には、三鷹市大沢
に中近東文化センターを、古代中近
東及びイスラーム期の考古・美術工
芸品を展示し、専門的に研究する分
館として創設しました。平成元年に
は、出光美術館(大阪)を開館し、
昭和39年開館の福岡出光美術館と併
せて、3館で館藏品による企画展を
開催しています。

美術館は、帝国劇場ビルの9階に
あり、日比谷通りに面し、江戸城
(現皇居)跡のお堀や緑をロビーか

ら見るができます。展示室は3
室に分かれ、年7・8回の企画展を
開催し、常設展示として、日本や朝
鮮・中国の窯跡から出土した陶片を
見られる資料室も付属しています。

収蔵品の柱は、仙厓禅師の書画
のほか、風俗画・肉筆浮世絵・やま
と絵・文人画・琳派等の日本の絵画
及び書跡、唐津・伊万里に代表され
る日本陶磁、青花・青磁に代表され
る中国陶磁、茶道具等があります。
また、ジョルジュ・ルオー、サム・
フランシスらの近現代画家の作品も
あります。ロビーに面して、朝夕庵
(ちようせきあん)という茶室があ
り、日本文化としての静寂な空間を
鑑賞することもできます。

代表的な所蔵品として、国宝「伴
大納言絵巻」・同「古筆手鑑見努世
友(みめよのとも)」があります。
また、所蔵品の中には、渡辺華山と
関連する関東文人画家谷文晁や立原
杏所の作品が含まれています。もち
ろん、華山作品としては、「鷓鴣捉
魚図」「黄雀窺蜘蛛図」「猫図」とい

う渡辺華山の展覧会でもおなじみの
作品が所蔵されています。

また、企画展期間中には、水曜講
演会(会員制ですが、先着順定員限
定で聴講可能の申込制度あり)が開
催され、作品・美術についての講演
を聴講することもできます。

田原町博物館学芸員 鈴木利昌



神戸小学校で 聞きました 華山を知 てますか？

1 とき 平成十四年二月八日(金)の授
業後

2 参加してくれた人

太田悠介君、上村聡宏君(とも
に6年)、玉越先生

聞いてます。

「自刃」なんて難しい言葉を知
ってるんだね。

児 ぼくは、華山会館は知ってる。

児 「渡辺華山」を知ってますか。
はい、聞いたことはありません。

児 たしか、田原藩の家老だった人
です。

児 ぼくは、名前はよく聞くけど、
あまり知りません。

児 開国を唱えた人で、蛮社の獄
で逮捕された。

児 先生はどうですか。
私は赤羽根の生まれなんで、
歴史の勉強の中で、「渡辺華山」
という人が、地元にいるという
ことを知った程度です。

児 もっと、華山について知ってい
ることがあったら……。

児 最後に、親に迷惑をかけるとか
言って、自刃したようなことを

聞いているので、華山を身近

に感じていますが、君たちの場
合、ちよつと華山との距離があ
るんだね。

児 「池の原」へ行ったことがあ
ります。

児 銅像がありました。
銅像を見て、何を思いましたか。
そこで説明を受けたんです。そ
れで自刃のことも分かりました。

児 「田原町博物館」を知ってる？
今年、そこへ行きました。

児 絵の展覧会を見に行きました。
華山についての展示物があった
でしょう。

児 パンフレットを買って、それ
に「華山」とか書いてあったけ
ど、むずかしかった。

児 学校には、今、総合学習の時間
があるでしょう。そんな中で、
郷土調べなどやったことない？

児 うーん、ないですね。
神戸地区の郷土の偉人を勉強し
たこともありませんか。

児 今のところありません。
総合学習は、ますます充実が図

られると思いますが、そんな中
で、華山や郷土の偉人を調べる
という計画はありませんか。

教 直接的にはありません。五・
六年生は植物を育てることが中
心です。五年はコメ、六年はケ
ナフ……。歴史的な学習は、計
画としては持っています。

学校図書館に、「渡辺華山」に
関する本がありますか。

児 学校の図書館ではないですけ
ど、文化会館の図書館で見たと
があります。そこで、ちよつ
と読んだことがあります。

児 移動図書館でも見たことあり
ません。

学校図書館にも、華山の伝記を
入れてもらって、まず本を讀ん
で勉強してほしいですね。先生
お願いします。

教 はい、努力します。
これから、華山についていろ
いろ勉強して下さい。今日は、ど
うもありがどうございました。

(聞き手・文責 林和彦)

田原町博物館から のご案内

企画展のご案内

四月二十四日～六月二日

春の企画展「北斎漫画展」

画狂人が与えたジャポニスム

(企画展示室1・2)

渡辺華山風俗画の世界

(特別展示室)

観覧料

一般 五〇〇円(四〇〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

() 内は二十名以上の団体の料金

平常展のご案内

三月二十六日～四月二十一日

谷文晁から渡辺小華まで

(特別展示室)

目で見る田原 明治時代を中心に

重要文化財

椿椿山筆丹稚像



(企画展示室1・2)

六月五日～七月十四日

渡辺華山・椿椿山とその周辺

(特別展示室)

椿椿山の弟子たち(企画展示室1)

田原の歴史 渥美古窯の時代

(企画展示室2)

七月十六日～九月一日

渡辺華山が活躍した時代

(特別展示室)

芝村義邦コレクション

陶磁器を中心に(企画展示室1)

田原の歴史 渥美古窯の時代

(企画展示室2)

九月四日～十月六日

田原城の歴史

(企画展示室1)

九月四日～十月十四日

渡辺華山と師谷文晁(特別展示室)

観覧料

平常展

一般 二二〇円(一六〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

() 内は二十名以上の団体の料金
毎週月曜日は休館、月曜日が祝日の場合は翌日

催しもののご案内

五月五日

鎧を着て城跡で写真を撮ろう

四月一日から電話にて先着順受付

五月十二日 午後一時三十分

春の企画展記念講演会

「北斎漫画の魅力」

講師 浦上満氏

(北斎漫画蒐集家・浦上蒼穹堂店主)

会場 華山会館鶴の間

入場無料

六月十六日 午前十時

博物館講座

「掛物(軸物)の扱い方」(申込制)

講師 小嶋義雄氏

(田原町文化財保護審議会委員)

七月十四日 午前十時

博物館講座「和本の綴じ方」(申込制)

講師 小嶋義雄氏

(田原町文化財保護審議会委員)

九月二十一日

田原城跡月見会

田原町博物館友の会会員募集中

入会申込書に十四年度分会費千円

を添えてお申し込みください。

特典

展覧会・催し物のお知らせ

視察研修に参加できます。

博物館だよりを郵送します。

華山会報第八号

平成一四年四月一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

事務局長 光浦貞佳

千四四一―二四二一

愛知県渥美郡田原町田原巴江二の一

TEL 五三二・三三・一七

FAX 五三二・三三・一七

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館

毎月第四土曜日研究会

視察研修に参加できます。

編集・協力

田原町博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

林 和彦 尾川新一

山田哲夫 我部山正

林 哲志 小川金一

柴田雅芳 加藤克己

中神昌秀 仲井千恵

華山会報ご希望の方は華山会館・

田原町博物館にお申し出ください。

次回発行予定平成一四年一〇月二一日